

俳句雜誌

空

空

令和3年5月31日発行

第19巻2号

通巻第98号



2021・5

SORA 96号

春の星(1)

柴田佐知子

大寒の水を砥石へまた垂らす

顔の彫り深むる父の冬帽子

赤子見てよろこぶ赤子日脚伸ぶ

木綿裁つ大きな鋏春近し

群衆が群衆を踏む二月かな

ぬくもりの消ゆれば骸春ならひ

王の墳巡れる水も温みけり

揚雲雀小ぶりの墳はかたまりて

如月や割烹着なら白でせう

黒髪は光の束や百千鳥

蠟梅の庭へ白寿の母誘ふ

母在れば降つてくるなり雀の子

跳ぬるたび貌新しき雀の子

紙風船子が飽きるまで突き返す

幾世経て調度の増えし雛かな



福岡 高倉 和子

光から影へと変はる浮寝鳥

捨つるごと忘れたき恋冬花火

焦がれては転生を待つ雪女

限界まで詰め込む電車冬の朝

川岸の草より凍ての緩びけり

てのひらに受くる間もなき春の雪

竜天に登る裏山ふくらみて

手の届くところで終はる春の夢

東京 中田 みなみ

新しき帽子に春の動きけり

山笑ふ女神掲げし海賊船

東風の試歩マーチ流れて恥づかしく

ふらここに老人小さく揺れぬたり

花散るも一つの区切り杖を買ふ

新しき杖の十歩は花菜なか

洋子亡き街の水辺に鴨残り

一切の音の消えたる水すまし

長崎 荒井 千佐代

紛れなく隠れの血すぢ梟啼く

揚船に赤子を寝かせ磯菜摘む

どんど了ふ上着の煤をはたき合ひ

地虫出づ己が身幅の穴残し

ぬかるみに筵を敷きて雛の家

永遠でなきゆゑ励むヒヤシンス

荒波を背に菜の花を束ね売る

引鶴や耶蘇集落に影落とし

埼玉 服部 早苗

冬帝に皇帝ダリア奉る

イヤフォンにカノン充血の目に枯野

星赤く添ふを拒まず寒の月

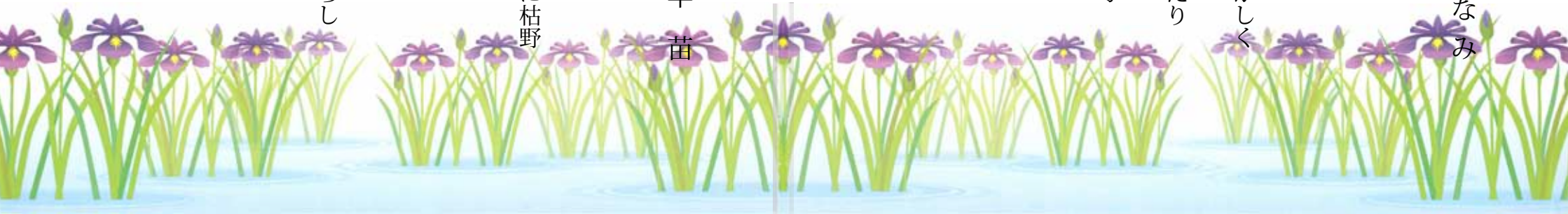
牛日や路にあふるる花屋の灯

七日粥くさかんむりのもの散らし

大寒や入る余地なき猫だんご

蠟梅や僧の手書きの掲示板

直感も達観も無し着ぶくれて



北九州 深川淑枝

海鳴りの町暮れかかる飾壳

斧光るたびの餅や年の暮

海鳴りの空ぞうぞうと七日粥

波消しに波の散りたる松納

山伏の護符のすすけて山に雪

狐火や山姥にもう挽かぬ白

虎落笛喉を落ちゆく誘眠剤

鳥の影過ぐ寝くぼみの干蒲団

広島 戸栗末廣

注連飾る五十七年目の所帯

黒潮の匂うてきたる初日の出

海原へ松の傾く恵方かな

鏡餅どこにも行かず誰も来ず

高波に風のぶつかる成人式

身をもつて火の海となす枯芒

寂けさをつらぬくも意思一冬木

深淵の水蹴つて翔つ冬の鳥

福岡 角野良生

訊きたきは訊きがたきこと蓼の花

梢より枯れ裸木となりゆけり

母牛の舌が産湯よ石露の花

湯煙の勢ひも冬に入りにつけり

囀鳴く籠を忘れて囀鳴く

干大根ゆつくり力抜きにつけり

鮫鱈の削ぎに削がれてをりにけり

そこだけに日の差してゐる福寿草



長崎

松尾龍之介

大陸とは一衣帯水うろこ雲
 赫々とコロナ禍中の唐辛子
 万両や主に殉じ庭の荒れ
 逆縁に異議は挟めず冬星座
 熊本県阿蘇市乙姫氷点下

粕屋

吉田 葎

桜の芽前方失ふ後円墳
 千年の桜に百の支へ棒
 桜東風子に囲まるる実習生
 仁王より背中押さるる夕遍路
 春夕焼千年のちも五重塔

大野城

森田明成

冬紅葉祈りし顔のあらたまる
 耳遠く隔たる世間日向ぼこ
 泥も草も込めし園児の雪達磨
 寒灯の飛び跳ねてゆく通過駅
 大寒や競り合つてゐる野面積

千葉

原友子

啓蟄や効能書きにルーペ当て
 葬送の曲に水尾あり春の鳶
 背伸びして屈みて剪定日和かな
 獣にも好きな通ひ路春の月
 農小屋の間口六尺麦の秋

福岡

永淵惠子

いくつもの罨を抱きて山眠る
 争へる白鳥に湖重くなる
 今打ちし鮭をひつ提げ男来る
 成敗の鬼の山より風花す
 着ぶくれて古書店内を横歩き

太宰府

山本則男

にはとりの一声高き寒日和
 けもの道残して山の眠りをり
 山眠る眠れぬものを抱きつつ
 ふくろふの浮力が森を拵げゆく
 燃えしふる櫓のありけり久女の忌

熊本

松田明子

河川敷ずぶ濡れにして出初式
 城門の押し開かれし弓始
 丹頂の一羽交りて鶴万羽
 山裾に鶴のをさまる時かな
 横一列鶴を数ふる鶴俱樂部

岡垣

田中とし江

流星群近づく体透けてゆく
 はへ縄を繰り出す流星群浴びて
 散らぬ葉は水面に映すもみぢ川
 ホルンへと吹きこむ息や冬銀河
 背ナ裂かれ鮫の目青く離れけり



北九州 河原敬子

金粉のこぼれてゐたる初座敷
 ふるまひの甘酒薄し初詣
 汁粉にもどんだの火の粉飛び来たる
 河豚鍋や野菜を花のごと盛りて
 月の石見し日や夜空冴えざえと

春日 三井所美智子

母のあと誰も作らぬ寒鮎煮
 酢海鼠を好きな男と連れ添ひし
 ふくと汁海底にある県境
 妹と布団の猫をとり合へり
 鯉濃の大鍋届く小正月

直方 曾根富久恵

天井を擦るやうに煤払ひ
 水指は骨壺に似て虎落笛
 冬の芽のうぶ毛光を放ちけり
 東は修験の里や初日の出
 御点前は夫が正客初稽古

福岡 山内碧

羽根ついて負けず嫌ひの子が泣きぬ
 負けてやれと父の目配せ歌留多取
 二重跳び見ると子が言ふ蝶の昼
 ほめられて三つ目を編む毛糸帽
 一揆など無縁の里やよもぎ餅

北海道 押田裕見子

雪女墓は深山の洞穴に
 冬灯父母のなき身の爪を切る
 嚏して少し身軽になつてをり
 通院の薬包を手にクリスマス
 魂の抜けし手套が道の端に

大阪 井上和子

酒蔵の酵母息づく冬の月
 老松の樹脂一月の日に透くる
 伐採の根方に寒の酒そそぐ
 蠟梅の匂ふ呼鈴押して待つ
 屏風絵に南蛮人の肘枕

粕屋 秋晴

初場所や和服姿の解説者
 あたたかや猫が一等席を占め
 網目より栄螺の棘の突き出せり
 雲水の黒衣のなびく春の山
 春一番吊り橋揺れて長くなる

福岡 西住三恵子

天に鳩地に人の列初詣
 継続は苦楽に似たり寒の雨
 如月や鐘撞き堂に鳩遊び
 補聴器の身に添うて来し寒ざらひ
 杜深く鳥の一声初茜



直方 石橋 幾代

冬ぬくし触るれば猫に嫌はれて
手も足も縮め蒲団を被りけり
奴風空動かしてゐたりけり
死者祀る御堂この世の雪つもる
寒雀一羽遅れて去りにけり

福岡 秋津 令

爪切りの届かぬ足や春隣
大仰な挨拶受くるお元日
一斉に整ふ声や初稽古
料峭や度数の高き酒買うて
霾や肉投げ入るる動物園

須恵 苑 実耶

一升瓶携へて来し年始客
臥す父の声のよく出るお正月
鬢付の匂ひ漂ふ初戎
どん底は見上ぐる処寒明くる
起き抜けの全き空と初音かな

東京 今井 康子

摺り足で落葉の道を楽しめる
松納見慣れし門の新たなる
口紅のまだ似合ふ母寒牡丹
十三詣振袖に乗る大人顔
若草やかつての名馬鼻を寄す

兵庫 青木 朋子

吊り紐も添へて渋柿売られけり
伐らうかと話しゐる木へ尉鷄
鈴鳴らす役も加へて聖夜劇
大根太し抱いて体重計に乗る
炬燵布団めぐりて老いし猫誘ふ

大阪 田岡 千章

硬質の素描に蓬の枯れにけり
牡蠣啜る勇躍したる喉仏
聖樹立つ歯科に尖れる治療器具
佳きことは予定のなき日暦果つ
乾電池一本を換へ年用意

北九州 横田 敬子

猪狩や瀬音に混じる銃の音
鶏を飼ひゐし頃よ鼈買
小犬より大きな猫よ冬暖か
すき焼きやコンロの前にいつも父
寒波来る電池の切れし腕時計

神奈川 窪み ち子

葉隠れの茶の花はやも昏れて来し
故郷の野の明るさよ齋粥
かるた会髪きつちりと背に束ね
冬落暉軒の雀は火の色に
余白多き日記の上を冬の蠅

